

(一) 中国史上において、宋代は社会・文化の各方面で大きな変化が起きた時期である。そして、中国社会で信仰されてきた宗教である道教でも、宋代にはさまざまな新しい動きが起きた。

道教の宗教活動のひとつである儀礼の方面にかざると、宋代以降に出現した新しい儀礼が道教に取り入れられるようになったことは大きな変化であった。宋代には、天心正法や雷法といった、新しい儀礼が次々と生み出された。それらの儀礼の多くは、病氣治療や雨乞いといった生活に密着した問題を解決するのを目的としており、当時の社会の要請にこたえるものであった。そのため、広く普及するようになり、道教の聖職者である道士たちにも用いられるようになった。

本論文では、天心正法や雷法といった、①宋代以降に出現し、②崇拜する神格を中心にして符や呪文といったさまざまな道術をまとめ、③「某法」などとして体系づけられている、そのような儀礼を「道法」と総称する。そして、それらの「道法」の儀礼書の分析をおして、特色を明らかにする。また、「道法」が普及したことにより、道教の聖職者である道士たちの宗教活動にいかなる変化がおこったのかを説明する。「道法」の研究をおして、宋代における道教の変化について明らかにするのが本論文の目的である。本論文は三部構成となっているので、以下、その構成に沿って概要を述べる。

(二) 第一部「唐宋時代における北帝信仰の展開」では、唐代に「北帝」という神格に対する信仰が盛んとなったことに着目して研究を行った。この「北帝」を継承した神格である北極紫微大帝は、「道法」のうちもっとも早く出現した天心正法の「祖師」とされ、その配下の北極四聖ともども、のちの「道法」でも尊崇された。第一部はいわば「道法」の前身といえるものであり、北帝から北極紫微大帝への信仰の流れを考察していくことで、「道法」のルーツのひとつを説明することを意図している。

第一章「六朝時代から唐末までの北方に配当される神格」では、はじめに六朝時代から唐代の道典に見える「北方の領域にいる帝」という性格をもった神格について概観した。そして、杜光庭の残した資料を検討し、①鄭都山の北帝、②靈宝經の五帝のうちの黒帝、③北極の神という北方に配当されていた神格が、唐末には「北帝」の名の下に統合されていたことを示した。

そして、その「北帝」の信仰が北極紫微大帝に継承されていくことになる。第二章「北帝から北極紫微大帝へ——経典からの考察」では、各種の経典の記述から、北帝から北極紫微大帝への信仰の流れを明らかにした。本章では、まず『太上元始天尊説北帝伏魔神呪妙経』(以下、『伏魔神呪妙経』と略称する)巻一の「叙議品」の内容と、そこに説かれる北帝についてその特色を明らかにし、「叙議品」に見える北帝が、第一章で述べたような、さまざまな神格の性格を統合したものであることを指摘した。次に、『伏魔神呪妙経』をもとにした一群の経典(本章では「七真系の経典」と称す)が作られ、それらの経典にも「叙議品」と類似した北帝が記されていることを明らかにする。そして最後に、北宋時代に書

かれた『洞淵集』には、「紫微北極五靈帝君」、つまり北極紫微大帝について記してあり、その内容は『伏魔神呪妙経』や「七真系の経典」をもとにしていることを指摘する。そのことにより、宋代の北極紫微大帝が北帝のイメージを継承した神格であったことを明らかにした。

第三章「宋代における北極紫微大帝の信仰」では、宋代において、道教の神格の体系における北極紫微大帝の位置付けが完成する過程を明らかにした。宋代において、道教の神格体系が整理されていく中、北極紫微大帝は道教の最高神の「三清」に次ぐ高位の神格のグループである「四御」の一員とされるようになった。そして、北極紫微大帝の地位が高まると同時に、北極紫微大帝の守護神として「北極四聖」と総称される神格のグループも形成された。また、北極四聖の神格はもともと北帝と何らかのつながりを持つものであり、北帝を継承する北極紫微大帝の配下として再編成されていたことも示した。

なお、二つの補論は、いずれも唐宋時代において北帝信仰において重要な位置を占める『伏魔神呪妙経』について述べたものである。補論一『太上元始天尊説北帝伏魔神呪妙経』の成立年代―「叙議品」を中心に―では、唐宋時代において、北帝を主題とする経典の代表的なものである『伏魔神呪妙経』、とりわけ巻一の「叙議品」の成立年代を検討した。資料の制約もあり、厳密な成立年代を明らかにするのは難しいが、「叙議品」の成立年代の上限は玄宗朝のころ、そして、下限は九世紀末の唐朝の滅亡寸前の頃と推測した。そして、「叙議品」が述作されたあと、もしくは同時期に、同じような世界観を持った経典が編纂されていき、それらの経典が、道蔵本の『伏魔神呪妙経』の素材となったと指摘した。

補論二『伏魔神呪妙経』に見える道術』では、『伏魔神呪妙経』に記されている独自の道術を取り上げ、その特色を明らかにした。また、第一章で述べたように、唐末には「北帝」はさまざまな由来を持つ神格の性格を統合した神格となっていたが、その神格の統合が『伏魔神呪妙経』の道術にも反映されていることを指摘した。

(三) 第二部「宋代における「道法」の出現とその後の展開」は、「道法」の儀礼書の内容を検討し、「道法」の儀礼の構造と、「道法」が次々に形成されていく仕組みを明らかにしたものである。

第一章「天心正法の形成と展開 ―儀礼書の比較からの考察―」では、もっともはやく出現した「道法」である天心正法の儀礼書の分析をとおして、天心正法によって形成された「道法」のシステムとは一体どのようなものであったかを考察した。

本章では、『道蔵』に見える天心正法の文献の編纂された順番を整理し、それにもとづき天心正法の変遷を追った。その結果、天心正法は、①天心正法を行う道士（民間の宗教職能者であれば「法師」）が天界の機関である北極馭邪院に所属し、神々を使役して問題を解決するという形式を持つこと、②祖師の上清北極大帝（北極紫微大帝）や張天師といった神格を崇拝し、それらの神格に関連する道術を用いる、という構造を持っていたことを明らかにした。また、その時々で効力があると思われる道術を導入することもあり、その場合は上記のような枠にはとらわれず、自由に道術を取り込んでいたことも指摘した。

以上のような、天界の機関や崇拝する神格を中核にしてゆるやかに道術を統合していくという形式が天心正法によって確立されると、南宋時代以降、その形式を模倣して数々の「道法」が生み出されていった。第二章と第三章は、それらの新出の「道法」がどのよう

に形成されていったのかを明らかにするものである。なお、天心正法からの展開がわかりやすいように、いずれも天心正法と関連のある「道法」の儀礼書を考察の材料としている。

第二章「道法」の形成と派生 ―「上清天蓬伏魔大法」と「紫宸玄書」を中心に―では、はじめに「上清天蓬伏魔大法」で使役される神格について検討し、この「道法」には神格のグループが大きく分けて二つあることを明らかにした。さらに、もともと存在していた神格のグループに、新しい道術に関する神格のグループが加わったことによって、神格のグループが二つになったことを指摘した（また、そのことは、この「道法」が少なくとも二つの段階を経て形成されたことも示している）。次に、「紫宸玄書」という「道法」の儀礼書の中では、その二つの神格のグループが融合して一つのグループになっていることを指摘した。また、新しい道術が登場すると共に、さらに新たな神格が考察されていることも述べた。これらの考察により、先行する「道法」に対して独自性を出すために、新出の「道法」が新しい道術と新しい神格を導入していったことを明らかにし、南宋以降、「道法」が次々に形成され、さらに派生していった過程の一端を述べた。

第三章「道法」における道術の交流―玉堂大法と童初正法を中心に―でも「道法」が派生していく過程の一端を明らかにした。本章では、新出の「道法」が、その「道法」独自の新たな道術だけでなく、既存の道術をも導入して儀礼書を形成していった事例をとりあげた。

まず、『无上三天玉堂大法』と『上清童初五元素府玉冊正法』という二つの「道法」の儀礼書を分析し、以下のことを指摘する。第一にそれぞれの「道法」の起源について独自の伝承を形成していったこと、第二にそれらの伝承などを反映させながら、既存の經典や「道法」から道術を導入していることである。その結果、さまざまな由来を持つ道術を含んだ「道法」が形成されていったことを明らかにした。

さらに、玉堂大法と童初正法のような「道法」が出現した原因についても考察を行った。まず、唐代までに整備された道士の位階制度においては、それぞれの位階ごとに伝授される道術が固定していたことを示した。それに対し、「道法」は従来の位階制度とは別に伝授されていたため、位階制度の枠組みにとらわれることなく、「道法」同士で道術の交流が自由に行われていたと推測した。

第三章における考察からは、さまざまな由来をもつ道術をふくむ「道法」が道士の間で伝授されるようになったことにより、道士が用いる道術がより多彩なものとなっていったことを示唆した。続く第四章「道法」における儀礼書の伝授」では、その考察を裏付けるため、「道法」の儀礼書の伝授の仕組みについて明らかにした。

先述したように、唐代の道教における位階制度では、道士は経籙を伝授されることによつて法位をあげていき、経籙とともに道術の方法を記した儀礼書も伝授されていた。しかし、宋代の筆記資料には、道士ではない民間の宗教職能者が「道法」を用いる例が多く見受けられる。それらの例からすると、「道法」の伝授を受けるに際して、道士として経籙の伝授を受けていることは必ずしも要求されていなかったようである。

本章では、その点を確認するため、天心正法・玉堂大法・童初正法・靈宝大法の儀礼書に見える伝授の規定について検討した。その結果、いずれの儀礼書においても、「道法」の儀礼書のみを伝授する規定が記されていることがわかった。つまり、天心正法なら天心正法の儀礼書、童初正法なら童初正法の儀礼書を伝授されれば、経籙の有無に関係なく道術

を習得することができたわけである。

ただし、靈宝大法に関しては経籙の伝授を受けていることが前提条件となる規定があるが、テキストによって、どの経籙までの伝授が必須とされているかは違うようである。南宋時代の道士である金允中は靈宝大法を伝授される前提条件として、洞玄部までの経籙を伝授されていることが必要であるとしている。それは、靈宝大法が黄籙齋を主軸とする「道法」だからである。従来の道士の位階制度では黄籙齋の儀礼書は洞玄部で伝授されていたため、金允中は靈宝大法を洞玄部に配当していた。金允中は、道士が伝授された経籙と、その道士が用いる「法」が対応しないといけないという厳格な意見を持っていたため、靈宝大法の伝授に際して洞玄部の伝授を受けていることを要求したのである。また、「太上天壇玉格」という資料にも、道士の伝授されている籙と「法」が一致していることを要求する意見が記されている。

しかし、本章で見えてきた「道法」の儀礼書を見ても、靈宝大法をのぞいて法籙の伝授は必須とされていない。南宋時代において、道士の間で「道法」の普及が急速に広まるのも、「道法」の儀礼書を伝授されれば、経籙の有無にかかわらず容易に新しい道術を習得できたからであると推測した。

(四) 第三部「宋代の道士による「道法」の受容」では、宋代において道士が「道法」を受容することにより、道士の修行の形態や宗教活動にどのような変化が起きたのかを明らかにする。

第一章「宋代における道士の概況」では、宋代の一般的な道士がどのように宗教活動を行っていたかを述べた。とくに道士の宗教活動を考えるにあたって重要となる、道観の制度、道士の位階制度、そして教派について検討を行った。

まず、宋代の道観の制度の概要を述べた。宋代の道観には、十方住持と甲乙住持の二つの制度があった。十方住持の制度とは、ある道観の住持を決める際に、その道観で修行を積んだ道士にかぎらず、優秀な人材を他箇所から招聘してもよいというものである。それに対し、甲乙住持の制度では、住持が師弟によって継承されていくという形式を持っている。しかし、宋代の資料を見ると、甲乙住持の道観から十方住持の道観へ道士が移籍する例がよく見受けられるので、道観の制度は違っても、道士たちの宗教活動の基盤には共通したものがあると推測した。

さらに、宋代の道士たちの共通した基盤となっていた教法は、天師道の整備した受法のカリキュラムと位階制度に沿って習得されるであったと推測し、宋代の資料に見える道士の法位が天師道のものであることからそれを裏付けた。道士はほかの道観に移籍することもあったが、共通の修行を行っていたことにより、問題なく宗教活動を行うことができたようである。つまり、宋代の道士はみな天師道の道士であることを明らかにした。

また、南宋時代、龍虎山・閤皂山・茅山の三山が経籙の伝授を独占していたという記事について考察した。結果、三山が主要な聖地であったのは間違いないが、ほかの地域の道士たちが帰属意識を持つほどの影響力はなかったと推測した。さらに、三山と教派の関係についても検討した。従来、三山それぞれを独立した教派としてとらえるのが一般的であったが、三山でも天師道の位階制度にしたがって道士たちが修行していたようであり、独自の教理を持って活動していたわけではないことを明らかにした。

なお、補論「三山における経籙の伝授」では、現在残されている史料から、三山の宗壇における経籙の伝授について検討した。その結果、経籙の伝授が決まった日（三元日かそのいずれか）に行われていたこと、在俗信者も伝授の対象となっていた可能性があること、経籙が印刷され量産されていたことを指摘した。また、時代が下った元代の史料によって、龍虎山の張天師が三山の符籙についての権利を掌握したことも述べた。

以上に述べてきたように、宋代の道教は天師道であった。ただし、北宋の末期から、道士の間で「道法」の伝授がなされるようになり、それ以前の道士とは修行の形態に違いが生ずるようになった。その変化については、第二章以下で詳しく検討した。

続く第二章「南宋時代の道士の称号―経籙の法位と「道法」の職名―」では、南宋時代の道士の称号を分析し、それらの称号が経籙の伝授による天師道の法位と、「道法」に由来する職名から成っていることを明らかにした。

天心正法をはじめとする「道法」では、道士は天界の機関に所属すると考えられ、その機関の職名を持っていた。そして、「道法」を用いて功績を上げると職のランクが上がるといふ、独自の位階制度をもっていた。そのため、「道法」の位階制度にもとづく職名も道士の称号に加えられるようになったのである。

つまり、南宋時代の道士たちは天師道の位階制度によって修行する一方で、「道法」の伝授も受けるようになったのである。そして、時代が下った元代や明代の碑文にも南宋時代と同様の道士の称号が見出せることから、そのような修行の形態が一般化したことも指摘できる。「道法」の出現は、道士の修行の形態に大きな変化をもたらしたのである。

補論「道法」の伝授の事例」では、「道法」の伝授の具体的な状況がわかる史料を紹介した。結果、南宋時代の道士たちは天師道の位階制度と「道法」の修行を平行して行っていたこと、そして、師となる道士によって伝授される「道法」の数も種類も異なっていたことを示した。また、複数の師から別々の「道法」を伝授された例もあげ、「道法」を伝授する側と伝授される側の両方から「道法」の伝授について検討した。さらに、「道法」の伝授が繰り返されるうち、科儀書のテキストや道術による分派が起きていたことも明らかにした。

なお、それらの事例からは、天師道の位階制度による経籙の伝授と「道法」の伝授のちがいも見えてくる。天師道の位階制度による経籙の伝授であれば、どの道士でもほぼ同じような經典や符籙を伝授されたはずである。それに対し、「道法」の伝授においては、法統や道術によって伝授される儀礼書のテキストの内容には違いが生じていた。そして、それぞれ伝承者たちが正当性を主張することで、分派を繰り返していったようである。

(五) 最後に、附録として「真武神の図像の新資料―北京大学所蔵の拓本三種―」を収めている。南宋時代の石碑の拓本により、第一部と第二部で言及した真武神の図像を紹介するものである。また、碑文の内容から、真武神に対する信仰について具体的に示すことを企図している。

以上が本論文の概要である。